

わが心の自叙伝

菅原洋一

▷ 3

自分の本当の母親は、私を産んで半年ほどで亡くなっていたことを叔母の口から知らされたのは13歳のときだった。その衝撃の中、ラジオから「たそがれ」という古いタンゴが流れていた。つまりそれが私とタンゴとの出会いである。

ちょうど思春期だったこともあり、それ以来私は、おとなしく引つ込み思索な少年になっていった。さらに加古川東高校進学後に、腎臓を悪くして学校を長く休むことになったのだ。病床でいろいろなことを考えるようになった。今後の自分の人生を、初めてまじめに考えたのもこのときだったと思う。

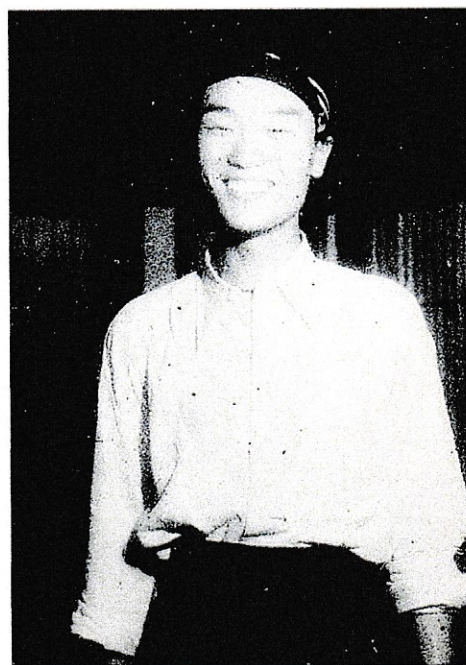
父が営心店を継ぐという手っ取り早い方法があったが、なぜか私は、あの日流れていたタンゴのリズムが忘れられなかった。いつも耳から離れないのである。

◆ 音大に入りたい！

そのうち高校を卒たら、音楽の道に進みたいと考えるようになっていったのだ。

とはいえ、歌手になりたいという夢ではなく、音楽大学で学んで、ゆくゆくは学校の音楽の先生になりたいと思いついた。やっとなりの思いを父に告げたときのことを思い出す。父はこう言った。「趣味で音楽をやるのはいいが、それで生活はできないだろう。普通の大学に進みなさい」

いやはや今考えれば至極当然である。確かに世の中も、戦争が終わったことで貧しくも自由や希望を少しずつ手に入れることができるようになっていた。しかし音楽で生計を立てること



高校時代の筆者

などは、やはり夢でしかないのである。実際それは今の時代もそう変わりはないと思いついてる。

カラオケが流行り出した頃、「一億総歌手時代」などという言葉がもてはやされたが、音楽家のプロとして生きてゆくには、実力に加えて運も必要。ましてや努力だけでは到底、かなうものではない。普通の大学に進み、手堅い将来設計を立てるのが賢明といえる。父の言葉は、もっともなことだ。自分も親になってから、その意味がよく分かるようになった。けれどなにしろ若い時期といものは、反対されればされるほど余計にしがみついてしまうもの。それが若さであり、燃えたぎる情熱である。

と決心した。だが音大受験など、どんなものなのか皆目見当もつかない。私の住む加古川から音大を受験したという人の話も聞いたこともなければ、音楽で生計を立てている知り合いもいなかった。それでも実技でピアノと歌の試験はあるらしいということだけは情報として耳に入ってきた。「大丈夫だ！」と変な自信だけふつつつわいてきて、私は大きな目標に向かって走り出したのだ。まさに無謀といふしかないのだけれど……。

当時の私は学校のピアノを触った程度でしかなかった。それでも音楽の先生にアドバイスを受けながら、放課後に音楽室のピアノで練習を始めた。それも初歩的な教則本バイエルからのスタートなのだから、音大に受かるなどは普通は考えられるはずもない。独学で約1年、ついに受験日がやってきた。(すがわら・よついち＝歌手)

燃えたぎる情熱 ふつつつと